

大野城市の文化財 1 (筒井の井戸)

大野城市教育委員会



筒井の井戸

地名の起こり

筒井の井戸は上筒井地区のほぼ中央部、筒井2丁目7番の地にあります。現在は飲み水としては使用されていませんが、筒井地区の共同井戸跡として地域の人達の手で大切に保存されてきました。そばには井戸を見守るかのように祀られた薬師如来の祠もあります。

この井戸について貝原益軒(1630~1714)の『筑前国統風土記』巻之九、御笠郡下の筒井村

の項に「雑餉隈より南に近き村也。村中に筒井とて清水あり。木の筒を以て井韓とす。是故に村の名をも筒井と云也。其水極て清冽にして、大旱といへとも涸す。常に筒の上に湧上る。只冬至の夜許水出すと云。」と記されています。

現代語に直すと、次のような意味になります。「雑餉隈の南の方にある近辺の村です。村の中に筒井というきれいな水が地面からわき出る井戸があります。その井戸は木の筒で井戸枠が作られています。それで村の名も筒井というのです。井戸の水は澄んでいて冷たく、長期間雨が降らなくても、常に水が下から井戸枠の上にわき上がってきます。ただ、冬至の夜だけはわき出てこないということです。」

『筑前国統風土記』には木の筒の井戸枠と書かれていますが、現在は石の筒です。どちらの井戸枠もいつごろ作られたのかわかりません。

この種の井戸は全国で数か所発見されていますが、大野城市の筒井の井戸は形、大きさ、美しさの点でもっとも優れたものであるといわれています。

筒井の井戸は、見事な花崗岩の石枠で地名発祥の由来を物語る記念物として、昭和47年4月15日に福岡県有形民俗文化財に指定されました。

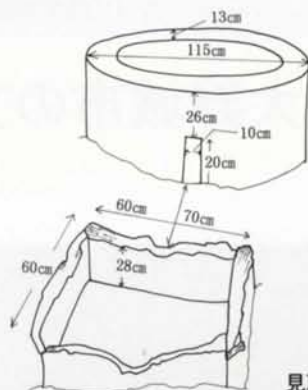


筑前国統風土記

発掘調査

昭和45年11月17日から3日間発掘調査が行われました。その結果、井戸枠は花崗岩を円形にくりぬいたものが二段に積まれており、上段の深さ76cm、下段は84cmであることがわかりました。上段の枠には、縁から少し下がった所に長方形の排水孔があげられています。この排水孔の方向から70cmほど離れた所に、洗い場と考えられる木枠が見つかりました。周辺からは、白磁、青磁、瓦、染付などの土器片が出土しました。白磁は中国の宋時代(960~1279)華南地方で作られたもので、日本の平安時代(794~1185)末から鎌倉時代(1185~1333)初期頃のものと考えられています。また染付や巴文の軒丸瓦は江戸時代(1603~1867)のものとして推定されています。

この調査で、井戸枠に作られた年代が彫り込まれているのではという期待もありましたが、紀年銘(年号をしるした文字)の確認はできませんでした。



見取図



発掘調査(昭和45年)

井戸の様子

第二次世界大戦(1939~1945)後しばらくの間までは、井戸のそばに直径50cmほどのセンダンの木がありました。夏は涼しく子どもたちもこの井戸のまわりで、溝の中の小さな魚をすくったり、石枠に生えている苔を集めたりして遊んでいたそうです。この井戸は石枠の上に水があふれていた

ので、使用する時には直接バケツなどを入れて水をくんでいました。水質が良くお茶の味を良くするので、遠くからも水をくみにくる人がいました。

昭和50年代前半までは清水が勢よくわき出ていましたが、50年代後半ころからその量が少なくなり、今では井戸枠の縁から30cmほど下までしか水がたまらなくなっていました。

参考

福岡県『福岡縣史資料』續第四輯、1943年
大野城市『大野城市史 民俗編』1990年

